蘇州における民俗生活の現状

馬　漢民（中国　中国俗文学学会常務理事）

蘇州は、2600年の歴史を持っている古い町である。幾たびか世の転変を経たが、伝統的民俗文化は、現代の生活にも豊富かつ多彩な形態で受け継がれており、蘇州文化の魂で有り続けている。ここで、蘇州における民俗生活の現状を簡単に紹介しよう。

蘇州民俗の外在的表現

1. 有形民俗（目で見える民俗事象）

廟会、春戯（春の祭りで上演する芝居）、走月亮、嫁送りと嫁迎え、梁上げ、葬儀、墓参り、家屋の飾りつけ、服飾、家屋用の魔除け、年中行事の飾りつけ、様々な図像、彫刻や飾り物などが、形が見える民俗である。

男の子が生まれると、まず「龍蛋」といわれる赤く染めた卵を持って、近所と親族のところに知らせに行き、喜びを多くの人々に伝える。一ヵ月後、「湯餅筵」ともいう「剃頭洗礼」を行い、男の子の産毛を剃り、客を招いて宴会を開いて祝う。これは公衆の前で行わなければならない。農耕社会において、労働力は非常に重視されており、これで家の後継者を公認してもらうためである。次は、毎年の旧暦4月14日に、蘇州の閶門の南浩街で行う「軋神仙」という廟会と8月18日に蘇州の西郊にある石湖で行う「走月亮」という行事がある。前者は仙人の呂洞賓への崇拝に関る行事であり、後者は当地の人々の月崇拝に関る行事である。両方とも幸福、平安、健康などを行事の目的としている。「軋神仙」の当日、現場で販売される物の品名には、すべて「神仙」の字がつけられている。「走月亮」は若い男女の出会いの場であり、その時には、男が女の胸を触っても怒られることがない。

旧暦の1月5日に「路頭」を迎える。「路頭」とは、民間で信仰されている「財神」であり、東西南北中の五つの方位を管理しており、「路頭」を迎えられる人は、一年中大儲けができると見なされる。それゆえ、必ず夜明けの時に街に出、香を炊いて爆竹を鳴らして財神を祭ってから営業を始める。子供の入学の日、親は必ずその鞄をひっくり返してから本を入れる。これは「書包翻身」といい、子供はよく勉強して、家のため名を挙げることを願っているのである。

2. 有形文化と心意現象の結合

蘇州のいたるところに、敷地の前に立てられる石や、門の上にかけてある篩や鏡、大蒜、福禄袋などがよく見られる。これらは端午節に艾や菖蒲を軒に挿すことと同じで、悪を除き、福を招くためである。また、家に病人がいると、門に桃の木の枝を飾り、来訪者に立ち入らないように示す。このような民俗は、病人のため静けさを保つほか、病気の伝染を防止する役割も果たしている。蘇州の名所虎丘の後ろに、「頼債（借金を踏み倒すの意）廟」という小さな廟があった。一年の借金を清算する大晦日、借金の返済ができない、あるいはしたくないものがこの廟に入ってしまうと、掛け取りは取り立てができないという約束事があり、それはきちんと地元では守られていた。ここに民俗が規范として機能していたことが見て取れる。

蘇州民俗の新しい変容

時代と科学の発展に伴い、非科学的な民俗は消えたり変わったりしてきた。たとえば、昔はマラリアを治療するには、水を壷に入れ、鏡を見るように病人の顔を水面に映してからすぐその壷を密封した。この方法によって、魂が守られ、もう病魔に襲われことがないと信じていたのである。また、なかなか妊娠しない女性がいると、中秋前後に「送秋」の呪いが行われる民俗事象があった。晴れの日の夜に、子供の多い家の台所に忍び込み、お玉の柄や牛をつなぐのに使う棒などを盗み、赤い布で包んでその女性のベッドに置くのである。このような呪術は性器崇拝の一種であり、今はもうほとんど行われなくなった。女の子が嫁に行く前夜、親族の女性がその家に集まり、泣きながら歌って惜別する民俗があったが、今はもう完全になくなってしまった。昔、蘇州辺りの農村に、人の葬儀で大きい声で泣き、葬儀の悲しい雰囲気を盛り上げて生計を立てる女性の業者がいたが、今はもういない。

近年、子供が大学に進学すると、母方の伯父は必ず衣装やスーツケース、ないしパソコンを贈るようになった。新しい家に入居すると、母方の伯父が台所用品ないし電気製品を揃えるほか、桶二つを用意して、自ら水を汲んで担いで新居に入り、幸福が川のように絶えないようにと祈るほかに、葬式の期間は昔の四十九日から三十五日に短くなった。結婚式は、昔は三日間かかるが、現在は一日で全部済ませるようになった。明らかに、民俗の伝統が薄らぎ、変容しつつある。この他にも、秘密結社や娼家に関わる民俗は消えてしまったし、大晦日に家庭で一家団欒の食事を楽しむという重要な習慣も、生活の変化と経済水準の向上によって、レストランで行うようになってきている。便利ではあるが家での年越しにあった暖かな雰囲気が失われつつある。